

平成28年度入学試験 小論文「出題意図」
(入試情報公開用)

人文社会学群 夜間主コース (現代教養コース)
社会人特別入試

現代教養コースのアドミッション・ポリシーに示された、「現代社会が直面する問題を解決するための“新しい教養”を身につける意欲」をもった学生を受け入れるため、現代日本社会の思想風潮を論じた文章を取り上げた。

問1 は、傍線部で著者の述べる「反知性主義的な態度」という言葉の意味を正確に読み取り、的確にまとめる能力（読解力、表現力）を見る。

問2 は、著者の職業フィールドだったテレビ・ドキュメンタリーの世界に関して、著者の述べる「台本至上主義」という考えを正確に読み取り、問1 で求めた解答内容と関わらせてまとめる能力（読解力、統合力、表現力）を見る。

問3 は、著者の述べる「台本至上主義的」な「反知性主義」の例を、解答者に現代日本社会の中から探し出させ、論理的に論じる能力（読解力、思考力、表現力、構成力の総合的評価）を見る。

平成 28 年度

小 論 文

人文社会学群 夜間主コース
(現代教養コース)
社会人特別入試

時間 90 分

++++++ **注 意 事 項** ++++++

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはならない。
2. この問題冊子は表紙を含めて 5 枚である。印刷の不鮮明な箇所などがある場合には、監督者に申し出ること。
3. 解答用紙の指定欄に、アルファベットを含む 5 桁の**受験番号**を必ず記入すること。
4. 解答はすべて別紙の解答用紙に**横書き**で記入すること。
5. 解答用紙の評点欄には、何も記入しないこと。
6. 解答用紙は持ち帰らないこと。

資料は、想田和弘著「体験的「反知性主義」論」（内田樹編『日本の反知性主義』晶文社、2015年 所収）からの抜粋である。これを読んで、以下のすべての設問に答えなさい。

問1

著者が傍線部で述べる「反知性主義的な態度」とはどのようなものか、具体的に200字以内で説明しなさい。

問2

テレビ・ドキュメンタリーの制作現場に巣食う「台本至上主義」は、どうして反知性主義的な制作態度であるのか。これについての著者の見解を400字以内でまとめなさい。

問3

資料に例示した「台本至上主義的」な「反知性主義」と同様の事例を、日本社会の中から1つ探し出し、その内容について600字以内で説明しなさい。

(注記)

解答にあたっては、漢字、かな文字は解答用紙の1マス1字とし、句読点、引用符、括弧などはいずれも1マスを使うこと。ただし、算用数字およびアルファベットは1マス2字とする。

知性の発動にショートカットはない

2014年の夏にこの原稿の依頼を受けてから、正直、僕は何カ月もの間、筆が進まなくて苦しんできた。書き始めては捨て、捨てては書き直しの繰り返し。

「反知性主義」という概念は、実にとらえどころがない。何をもちて反知性主義と呼ぶのか、定義や力点は論者によってまちまちだし、反知性主義の存在を示すような社会現象も多種多様である。「これが反知性主義の核心だ」と狙いを定めても、論じるうちに思考が狭小路に入って、出口が見つからなくなってしまう。

だから原稿の締め切りが近づき、いよいよ追い詰められてくるにつれ、安易な「解決法」が頭によぎり始める。例えば、本当は自分でもよくわかっていないのに「これこそが反知性主義の正体である」と無理やりに断言してしまおうとか。あるいは、ひとつの仮説にしか過ぎない結論を設定して、それに当てはまる材料を拾い集めて「証明」した体裁を作ってしまうとか。

そんな雑念に振り回され、自己嫌悪にかられる中で、ふと思った。

「あつ、いまのオレのような態度こそが、実は反知性主義の萌芽のようなものなのではないか」

知性とは、自分の頭で吟味し、疑い、熟考する能力や態度のことである。それは「結論先^{注①}にありき」の予定調和や、紋切り型^{注②}でお仕着せの思考を拒絶する。知性の発動に「ショートカット(近道)」はあり得ない。

それがゆえ、知性が充分に働くには時間と労力が必要である。同時に、時間と労力をかけて考えても考えても、なんの地平も開けず、したがって何の結果も得られない可能性もある。そういう「空振りのリスク」を深く引き受け、知的投資をドブに捨てる覚悟の上で、それでも誠実に「発見」や「気づき」を希求すること。それが、真に「知的な態度」なのではないか、と思う。

しかるに、原稿が書けなくて苦しんでいた僕は、空振りのリスクを嫌い、ショートカットを探し、安易な解決法に頼ろうとしていた。なんのことはない、僕は反知性主義について論じるために、反知性主義的な態度^{注③}をソリューションとして選ぶ癖を犯そうとしていたのである。

だが、この「気づき」は、僕にいくつか大事なことを教えてくれた。

一つ目は、反知性主義的態度は、本人がそう自覚せずとも、知らず知らずのうちに及び寄るものだという事。

二つ目は、反知性主義的態度は、効率主義や成果主義と相性がよいこと。

したがって、時間や心の余裕がないとき、人は反知性主義に陥りやすいということ。そしてそのとき、反知性主義的ソリューションがあたかも「ゴール」への近道であるかのごとく錯覚しやすい、ということ。

最後に、思えば僕自身、テレビ番組の制作を離れて「観察映画」の手法でドキュメンタリー映画を撮り始めたのは、まさにテレビ・ドキュメンタリーの制作現場に巣食う反知性主義と決別するためであったという事実である。

テレビ・ドキュメンタリーの台本至上主義

テレビ・ドキュメンタリーの制作現場に巣食う反知性主義とは何か。

それは僕が常日頃「台本至上主義」と呼んで批判する制作態度である。

一見、反知性主義とは関係の薄い議論に思えるかもしれないが、しばらくお付き合いいただきたい。

意外に知られていない事実だが、テレビ・ドキュメンタリーの大半には台本がある。番組ディレクターは通常、作りたい番組がある場合、まずはテレビ局に提案するために企画書を書く。企画書には、番組の「ねらい」や登場人物、テーマ、尺、大まかな内容、コストなどを書き込む。そして局側のプロデューサーからダメ出しを受けながら、何度も書き直す。企画書が通り、予算がついた段階で、番組の方向性は固まる。

企画が通ったら、今度は本格的なリサーチに入る。

例えば「福島第一原発事故による放射能汚染の恐ろしさ」を描くのが番組の「ねらい(ゴール)」であれば、まずは汚染の酷さを裏付けるためのデータを集めるであろう。また、汚染の酷さを証言してくれる科学者や調査機関、汚染が原因で苦しんでいる人などを探し出し、番組への出演依頼をするかもしれない。そして被写体候補との面会や打ち合わせを通じて、どんなシーンが必要で、どんなシーンが撮れそうかを洗い出していく。

次に、番組ディレクターはリサーチ結果に基づいて、構成台本と呼ばれるシナリオを書く。構成台本には通常、シーンの内容やショットリスト、想定されるナレーションなどを書き込んでいく。登場人物のセリフまでこまごまと想定して書き込む場合すらある。台本の構成には起承転結があり、「落とし所」と呼ばれるエンディングも用意する。要は撮影する前に、番組の青写真を作り上げておくのである。

この構成台本も企画書と同様で、プロデューサーから一発でオーケーをもらえることは稀である。たいていは何度も書き直しを命じられ、その都度シーンの順番を変えたり、シーンを追加したり、削除したりする。そしてプロデューサーやその上司にあたる人たちから「これでよし」と大鼓判を押されて初めて、撮影が許されるのだ。

自然、撮影現場では、ディレクターやカメラマンなど撮影スタッフは、構成台本に従いながら撮影を進めていくことになる。インタビューのときには、被写体に台本に書き込まれたセリフを言ってもらえるよう、あれこれ誘導したい誘惑にかられる。酷いディレクターになると、あらかじめ被写体に構成台本を見せながら、「ここはこういう趣旨のシーンにしたらいので、こういうことを言っていたらいい」などと打ち合わせたりもする。かくして、番組は反知性主義的な予定調和に陥っていくのである。

問題は、「現実」は決して台本通りには展開しないということである。

いくらリサーチを重ねて書いた台本でも、所詮は頭の中で作り上げたことなので、机上の空論の域を出ることはまず稀である。実際に撮影を始めると、現実はずっと台本で想定した以上に複雑怪奇で、作り手の予想を裏切り、安易に「理解」されることを拒む。しかも台本よりもよほど面白い。

その際にディレクターが勇気を持って台本を破棄し、曖昧模糊とした複雑な現実と直に向き合い、ゼロから再出発するならば、彼(彼女)は知性的態度を保つことができるであろう。

だが、それはかなり至難の技である。

なぜなら台本は、テレビ局の企画であれば直近のプロデューサーのみならず、組織のヒエラルキーの上層部の人たちも参照し、企画にゴーサインを出していることが多い。つまり出来上がった台本には、組織を通過させるために投じた莫大なエネルギーと時間が費やされている。

したがって、現場の判断だけで番組の方向性を変え、誠実に「世界」を探求しようとすることは、よほど理解のある上層部を持たない限り、「組織人」にとってタブーである。このような制作現場では、知的な態度は「未熟さ」や「要領の悪さ」と考えられ、組織的に禁じられているのである。

いや、そもそもディレクター自身、自分が書いた台本によって視点が固定され、知性が起動しなくなり、想定と矛盾する現実には目が向かなくなることも多い。例えば「福島第一原発事故による放射能汚染の恐ろしさ」を描く企画であれば、そのねらいに反する事態に出会ったとしても認知バイアスが働き、無意識のうちに視野から弾いて「否認」してしまいかねない。

また、たとえ現実が目に向いたとしても、当初の企画と真逆の方向に踏み出すことは心理的に難しい。なぜなら台本よりも自らの知的好奇心を優先することは、自分にとって文字通り「未知との遭遇」を意味する。どんな番組になるのか全く読むことができなくなり、「空振り」の恐怖を感じるからである。

注① 予定調和—小説やテレビ番組などで決まった結末が定められ、ストーリーがその結末に向けて収束していくこと。

注② お仕着せ—上から一方的に与えられた、きまりきった事柄。

注③ ソリニーション—問題などの解決、解明、解答。

注④ バイアス—偏向、偏り。